Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-11

女性の金融リテラシーの課題と可能性ー実証分析からの考察ー

荒木，千秋

(Degree)
博士（経済学）
(Date of Degree)
2024-03-25
(Date of Publication)
2026-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第8820号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490045

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文の要約

荒木千秋

論文題目

女性の金融リテラシーの課題と可能性　一実証分析からの考察一

要約

本論文は、女性の金融リテラシーを巡る論点として「なぜ、女性の金融リテラシーは男性よりも低いままなのであろうか」といった課題や、「金融リテラシーの低さから、女性は金融知識への関心の薄さがもたらすコストを負担している可能ないだろうか」という問題意識のもと、実証分析を行った。

本論文の主な目的は、以下の 2 点である。1 点目は、日本において女性の金融リテラシーが低い理由について考察し、具体的な要因を明らかにすることである。

2 点目は、男女間で金融行動の違いについて明らかにすることである。具体的には、退職計画・株式投資や投資信託の価格変動商品・暗号資産取引・キャッシュレス取引の経験に男女間の違いがあるのかについて検証した。さらに、生命保険の申し込みについて、店頭取引を重視しているかインターネット取引を重視しているかといった申し込みチャネルの違い、生命保険の加入件数や死亡保障金額という加入行動についても着目し、分析を行った。

本論文の第 1 章は論文全体の目的を述べている。第 2 章は、「金融リテラシーの男女差に関する先行研究の概観」として、(1)女性の金融リテラシーを巡る論点、(2)女性の金融行動における特徴的な態度、(3)自己評価や自信に関する先行研究（４）女性の金融行動、といった観点より先行研究を概観した。

次に、第 3 章は「金融リテラシーの男女間格差一数学力と将来計画一」として、女性の金融リテラシーについて、金融広報中央委員会が実施した金融リテラシー調□(2022)を利用して、女性の金融リテラシーが低い具体的な要因について明らかにした。その結果、日本における女性の金融リテラシーは、分野別にみると数学的な思考を必要とする金融経済の基礎、ローン等・資産形成に関して、男性よりも知識が不足していた。一方で、家計管理・生活設計、金融取引・外部知見の活用の知識は男性よりも優れていた。加えて、パートナーがいる女性、働いている女性は、金融リテラシーの改善がみられた。さらに、退職後の資金計画についても分析し、数学的思考を必要とする金融リテラシーの分野が退職計画についての影響を与えていた。金融経済の基礎、保険、ローン等・資産形成などのファイナンシャル・プランニングにおけるキャッシュフロー表の作成や修正するための知識が退職後の資金計画にも影響を及ぼしていることを明らかにした。女性の退職後の資金計画については、金融リテラシーの低さが将来計画に影響を与えていた。パートナーや就業

は、女性の金融リテラシーにポジティブな影響を与えていることを明らかにした。

さらに、第 4 章は「女性の金融行動は男性と違うのか―金融リテラシーの客観的評価と自己評価―」として、金融広報中央員会が実施した金融リテラシー調査(2019)をもとに、女性の金融行動に焦点を当てた実証分析を行った。金融行動としての変数は、4 つの変数を採用した。まず、資産形成をする上で取引規模が大きい株式投資・投資信託の投資経験(価格変動商品)、加えて、取引規模が拡大傾向にある暗号資産、決済サービスとして取引が拡大しているキャッシュレス取引である。これらの金融行動について男女間に経験の差があるのかについて分析を行った。加えて、金融リテラシーが金融行動に与える影響についても検証した。

第 4 章での貢献は、金融リテラシーの点数について、金融リテラシー調査(2019)での点数(客観的な評価)だけではなく、主観的な自己評価の金融リテラシーを変数として加えたことにある。主観的な評価を加えることで、金融リテラシーへの自信の程度が金融行動に影響しているのかを確認した。結果は、女性は株式投資や投資信託などの価格変動商品資産への参加は男性よりも低い傾向にあった。一方で、女性はキャッシュレス取引に関しては男性よりも参加する傾向にあった。金融リテラシーの影響は、客観的な金融リテラシーが高ければ、株式投資や投資信託の価格変動商品・暗号資産に参加する傾向にあった。自己評価として、主観的な金融リテラシーが高い場合も株式投資や投資信託の価格変動商品・暗号資産に参加する確率が高いことが明らかになった。

最後に、第 5 章は「多様化する生命保険加入チャネルと加入行動―保険知識と女性―」として、生命保険を取り上げた。公益財団法人生命保険文化センターより、2021 年 12 月に発表された「生命保険に関する全国実態調査」を利用して実証分析を行った。生命保険等の保険分野でも、男女間(第 5 章では、個人の性別ではなく世帯主の性別の違いとした)によって金融行動に違いがあるのかを検証した。第 5 章の貢献は、申し込みチャネルとして、店頭チャネルとインターネットチャネルの違いに着目した点がある。分析結果より、保険知識が高いと自己認識している世帯主は、ネットで申し込みたいと考える傾向があり、死亡保障金額と申し込み件数は増加することが明らかになった。世帯主が女性の場合は、インターネットチャネルでの利用を望まない確率が男性と比較すると高くなることが明らかになった。また、保険知識があると自己認識している女性の世帯主は、加入件数は有意には多くはないが、死亡保障金額は正に有意であり、230 万円程度死亡保障金額が増加していた。このことから、生命保険の加入についても性別の差があることが明らかになった。

本論文の結果より、「なぜ、女性の金融リテラシーは男性よりも低いままなのであろうか。」については、第 3 章より、女性が特に苦手としている金融リテラシーの分野として、数学的な思考を必要とする金融知識が男性よりも低い点にある。しかし、女性はパートナーと家庭を築くことによって金融リテラシーの点数にポジティブな影響を与えている。特に、保険とローン等・資産形成の 2 分野に関わる家庭内での経験が金融知識を押し

上げている可能性がある。就業も女性の金融リテラシーにポジティブな影響を与えていた。働いている女性は、総合的な金融リテラシー、保険、ローン等・資産形成の3分野で金融リテラシーの点数が高くなっている。女性の金融リテラシーが男性よりも低い理由は、苦手な分野に対して金融知識の普及がされていないか、または苦手だからこそ放置しているかなどが考えられる。また、女性はパートナーや職業の獲得によって、苦手な分野の金融リテラシーが改善されていた。これは社会的な経験が、金融リテラシーにプラスの影響を与えているのかもしれない。

次に、「金融リテラシーの低さから、コストを負担している可能性はないだろうか。」については、第3章・第4章・第5章の結果より、女性は、男性と比較して、退職計画を行うこと、株式投資や投資信託などの価格変動商品・暗号資産への参加は低い傾向にあった。一方で、キャッシュレス取引に関しては男性よりも女性の方が参加する傾向にあった。家計にとってライフイベントを達成するために必要なフィナンシャル・プランニングの最適化には、性別が要因で金融行動の差があることは資産選択に偏りが生まれている可能性があり、望ましくない。これらの要因は、金融リテラシーの程度によっても金融行動に影響している。第4章の結果より、株式投資・投資信託の価格変動商品・キャッシュレス取引ともに金融リテラシーが高くなれば参加する傾向にあることや、一方で、暗号資産取引経験については、金融リテラシーが高まると参加しない確率が高くなることから、金融リテラシーが低い場合、金融リテラシーが高い人とは異なる行動をとっているがわかる。その行動が家計にとって最適かは別途検証する必要があるが、金融リテラシーの低さにより、家計にとっての最適な選択ができず、金融リテラシーが高い場合と比較して、追加的なコストを負担している可能性が指摘できるであろう。

日本の社会では女性の大学進学率の増加や共働き世帯の増加など、社会的な職業観・家庭観の変化が、女性の金融リテラシーの向上に恩恵をもたらす可能性があるだろう。女性の金融リテラシー向上には、社会的な変化を待つだけではなく、女性が苦手な金融リテラシーの分野を補完できるような啓蒙活動も重要となる。苦手な分野を補完するために効果が高い方法を検討することを今後の課題としたい。加えて、本論文では、金融サービスを受給する側について分析を行ったが、金融商品を提供する側(供給側)の金融リテラシーについても、金融リテラシーに男女差がないか、また顧客に対して提案する商品に男女差がないか等を実証分析で明らかにすることを今後の課題としたい。